
揺られる

かにお

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
揺られる

【Nコード】
N4563I

【作者名】
かにお

【あらすじ】
娘の結婚式に赴いた父親の話。

ガタン、ゴトン——律動に揺られながら、私は焦る。
焦って、困って、正直、もうどうしようもない。

「ちょっと、落ち着いてくださいよ、恥ずかしいから」

と、私を非難するのは、隣に座っている女性、妻の美紀子である。
今日は髪の毛をアップにまとめて、シックな服装で決めている。

「いや、そんなこと言ってもさ……」

「もう、子供じゃないんですから」

呆れたように言って、美紀子は再び、列車の震動に身を任せて目を閉じた。

それで、私はまた手持ち無沙汰になってしまって、焦燥が助長される。

窓外の景色が素早く流れるのを見つめて気を鎮めようとしても、なんにもならない。ああ、もう。

「いてっ」

太ももが殴打された。見ると、美紀子が左手でもって私の太ももを叩いたのだった。

美紀子は再び目を閉じている。私はそんなにあからさまにそわそわしているのだろうか。

……多分、しているのだろう。

しかしそれもやむなし。何故なら、今日は私が生涯はじめて経験する、娘の結婚式なのだから。

「ふああ」

思わずあくびが漏れる。また美紀子に叩かれるかと思ったが、今

度は横目で冷たい視線を送られた。しかしそれもやむなし。何故なら、私は昨日、緊張してしまつてまったく眠れなかったからだ。

……ああ、これじゃあ本当に遠足前の子供じゃないか。美紀子の指摘は強ち間違つていない。

「ふう……」

いけない、少し落ち着こう。さすがに、周囲の乗客の視線が集まり始めているのを感じる。

「……………」

*

「お父さん」

「！」

気付くと、私は結婚式の会場にいた。美しいドレスに身を包んだ娘が、私を見つめている。

その瞬間、私の脳裏にあたかも走馬灯のように、彼女との思い出が次々よみがえってくる。

ああ、小さい頃は、よく一緒に近所のプールへ行つたな。

小さい頃のお前は動物園が好きで、何度も何度も行つたな。特に、パンダが好きで、放つておくと平気で何時間も居座り続けたな。

中学生の頃、お前は私を嫌うようになったな。下着と一緒に洗うなと、お母さんに怒鳴り散らしたのを、私は聞いていたぞ。少なからずショックだったけれど、私は大丈夫だった。何故なら、同僚の島

田が、『娘ってやつは、俺たちのことを無条件に嫌う。そういうもんだから、仕方ない』という話を、まるで自らに言い聞かせるようにしてずっと言い続けていたから、覚悟ができていたのである。

大学生にもなると、お前はようやく反抗期から抜け出して、私を毛嫌いすることもなくなっただな。しかし、今度は私を上手く使う方法を覚えて、それで私はほいほいお金を渡してしまったな。美紀子に叱られたこともあったけれど、仕方あるまい。あんなふうにしておねだりされれば、父親はころりと落ちるものなのだ。これも、島田が言っていたことだ。

あれは忘れもしない、大学二年生の夏。お前がはじめて家に男を連れてきた日だ。

平然とお茶など飲んでいる美紀子と違って、私は茶髪のちゃらちゃらしたのが来たらどうしようかとよほど焦ったのだが、そんなことはぜんぜんなくて本当によかった。

由希子、和成くんはいい人だぞ。大切にしてもらうために、大切にするんだ。愛情なくして、愛情は注がれない。それを忘れてはならないよ……。

*

「ううっ」

「……えっ？　ちょ、ちょっと、お父さん」

気付くと、ヴェールに包まれていた由希子の顔が、いつの間にか

ばつちり化粧をした美紀子の顔になっていた。

そして、私は煌びやかな光が眩しい結婚式の会場から、山手線の車内へと回帰している。

「もう、なに今から泣いてるんですか」

「あ、ああ、すまん」

まったく、格好がつかない。

「ほら、降りますよ」

美紀子のあとについて、目的の駅へ降り立つ。

「……ふう……」

「そんなんじゃ、本番で泣き崩れちゃいますよ」

「ああ、そうだな……はあ」

しかし、悲しいものだ……喜ばしいことであるはずなのに。

まさか自分がこんな情けない親父になるとは思わなかった。島田の娘の結婚式では、おいおい泣くあいつを馬鹿にしていたっていうのに、これじゃ示しがつかないじゃないか。

駅前からタクシーに乗り込み、

気付くと、私はスーツに身を包んで、式場へ至る巨大な扉の前に立ち尽くしていた。

慌てて周囲を見回し、ようやく状況を理解する。私は今から、娘と手を繋いで、式場を横切らねばならないのだ。今度こそ、本物の娘と一緒に。

……また夢じゃないだろうな。

頬をつねってみると、痛い。よかった、夢じゃない。

「お父さん、なにしてんの」

おっと、頬をつねったところを見られていたらしい。

振り向くと、純白のヴェールに包まれた由紀子の姿が、そこにあった。

＊

式が終わり、披露宴が終わり、二次会へなだれ込み——嵐のよ
うな時間が過ぎて、私は再び電車で揺られていた。下りの湘南新宿
ライン。家へと帰る路に、当然ながら由紀子はいない。

「美紀子、」

横を見ると、美紀子は俯いて寝息を立てている。起こすのも忍び
ない、そのままにしておこう。彼女も彼女なりに、気苦労があつた
はずなのだ。

思えば、結婚が決まってから今日まで、私はおろおろとしている
ばかりで、ドレスの手配や式場との折衝は彼女にまかせっきりだっ
た。

今日に及んでも、私は右往左往しているばかりで……。

嘆息して、暗く染まった窓外に視線を送る。夜景は既に東京を離
れ、煌びやかなものではなくなっていた。

由紀子はホテルに残り、明日から新婚旅行。私と美紀子は、普通
の生活に元通り。

ガタン、ゴトン——律動に揺られながら、私は……

（了）

（後書き）

男親の哀愁が伝われば。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563i/>

揺られる

2011年1月20日01時35分発行